

山と博物館

第52巻 第3号 2007年3月25日

市立大町山岳博物館



菊地俊朗氏による講演のひとコマ

当日の参加者は約80名。会場では時折熱心にメモを取る方の姿も見られました

記念講演会を開催しました

市立大町山岳博物館

当館では去る三月十一日に企画展開催記念・友の会総会記念講演会「嘉門次・品右衛門・喜作 登山の背景」（主催：市立大町山岳博物館、大町山岳博物館友の会、会場：当館講堂）を開催しました。この講演会は、当館の平成十八年度企画展「北アルプス 山人（やまうど）たちの系譜——嘉門次・品右衛門・喜作 登山の背景——」（会期：平成十九年一月二十七日～三月二十五日）の開催に合わせたものであるとともに、毎年この時期に行なっている当館友の会総会における記念講演会を兼ねたものでした。

講師に松本市在住の山岳ジャーナリスト・菊地俊朗氏をお招きし、北アルプスの山人であった上條嘉門次、遠山品右衛門、小林喜作が、国内の近代登山史に登場することになった背景について、当時の社会・経済状況などといった時代的背景を含めて解説いただき、これら三人の実像について迫りました。

当日は久々に雪が積もり、朝方まで雪が舞う空模様でしたが、日中は晴れ、県内外から約八〇名の参加者がありました。

参加者へのアンケートからは「登山の歴史を見るおもしろさを再確認した」、「山人の背景が多角的に語られ認識できた」、「独自の視点に立った三人の人物評はおもしろかった」、「三人に関して」大系的な歴史的な文献がないにも関わらず、詳細な調べを分かり易く講演されて大変興味深かった」などの感想が寄せられ、好評をいただきました。当館では今後も、北アルプスの登山史に関して、こうした催しや企画展を積極的に展開させていきたいと思えます。

ザラ・針ノ木越えの検証(一)

小林 茂 喜

戦国時代の末、天正年間に、佐々成政がザラ峠・針ノ木峠を越えて浜松に至り、家康と会ったということは戦国史を彩る一大壮挙とされています。各地にそれに関わる伝承が残り、江戸時代の様々な記録類にもその伝承が蒐集されています。

成政は、秀吉より早くから信長の家来であり、信長の親衛隊(黒母衣衆)長として数々の戦いで活躍しましたが、後に信雄(信長二男)を援けて秀吉と対立し、最後は肥後の国一揆の責任を取らされて摂津尼崎で切腹させられた「悲運の名将」といわれている人物です。秀吉でさえ「大勇士」と称え、秀吉がその武略を恐れたために一揆にかこつけて始末したといわれていますが、そういう人物であるだけに、ザラ・針ノ木越えは戦国名将の大冒険として、古くから多くの人々に史実と信じられてきました。

しかし、一方には、ザラ峠・針ノ木峠の地形や旧暦十一月(新暦十二月)下旬という時期から、ザラ・針ノ木という二つの峠を越えることは不可能ではないかと考える人々も昔から少なくありません。私の印象では、どちらかといえば歴史愛好家はこれを史実と考える人が多く、登山家には、お話に近いと考える人が多いようです。後で詳しく見ることにしますが、登山のプロが難しいと感じることは、耳を傾けなければならぬ本質的な問題があるように思われます。

クリスマスから年末にかけてのこの時期は、

毎年気象が崩れ、大雪に見舞われることも珍しくないことは、地元の人ならばよく知るところです。雪崩の殆どは降雪中や直後に起こるといわれています。両峠は、峠とはいっても、壁のようにそびえる山岳地帯の、ほんのわずかな鞍部にすぎません。周辺は、真冬には「雪崩の巣」と呼ばれる雪崩の常襲地帯であり、夏でもわずかな高山植物やハイ松があるだけの場所です。私も、針ノ木峠には何回となく登っていますし、ザラ峠にも三度足を運びました。こういう峠を、真冬に、一説によれば百人近い集団が無事に往復できたとは、ちょっと信じられないことです。水量の多い黒部川を、真冬にどう渡渉したかも大きな問題となるでしょう。

ところで、家康の側近に松平家忠という人がいます。この人が書き残した「家忠日記」には、十二月二十五日に「佐々蔵助」が浜松にやって来たということがはっきりと記されています。ですから、成政が天正十二年の十二月二十五日に浜松にやって来たことは間違いない事実だと思えます。当時、成政は背後から越後の上杉に攻められ、前田利家とも対立して国境で戦っていました。そんなときに浜松にいる家康に会いに行くのは大変危険な行為です。どこをどう通るか成政も考えに考えたにちがいありません。敵地をまったく通らないとすればザラ峠越えしかありません。やはり、成政はザラ峠・針ノ木峠を越えて浜松へ至ったのでしょうか。もし越えな

かったとしたら、他に浜松へ行く道筋などあるのでしょうか。こうした点について、事実を明らかにしながら検証してみたいと思います。

一 ザラ越えを伝える史料や記録類

成政のザラ・針ノ木越えに関わる史料・記録類はたくさんあります。その主なものを年代順に掲げると「表1」のようになります。これらがどのように位置づけられるかについてまず考えておきましょう。

これらのうち、その時代に生きていた人が自分のことや周囲のことを直接に書き記したものは家忠日記です。勿論これは、ザラ・針ノ木越えを伝えようとしたものではありませんから、そこに記されていることは最も信頼できるものといえます。当代記もそれに近い史料ですが、伝聞も書かれていますので、その分割り引いて考えなければなりません。

武功夜話とは、後で詳しく見るように、織田信雄に仕えた長兄、秀吉に仕えた次兄、そして佐々成政に仕えた末弟の前野三兄弟の事跡を中心に、時代の出来事を記したもので「語り」や「言い伝え」の性格の強いものですが、それぞれの手控え(メモ類)や書簡等を下敷きにかかれたものと言われ、当事者しか知りえない当時の重要な背景や状況が、個人の心情にも触れつつ丁寧に書かれていることに特徴があります。したがって「客観性」ということでは少し気をつけなければならぬ点はあるものの、事実についても背景についても信頼性の高い重要な史料であると言ってよいでしょう。

これらに対して甫庵太閤記以下は少し別の性格を持っています。甫庵太閤記は「調べ書

き・聞き書き」であり、しかも自分の考え方に合うように、事実が改ざんされていると言われています。史実というより歴史物語といったほうが良い物語性の強いものです。ですから事実を確かめていくときには注意深くあつかわなければなりません。「末森記」も、岡本慶雲という成政・利家の両君に仕えた人物が、自分の体験を中心にまとめたものですが、「且つ且つ取り集め」「老後の一筆」と後書きで言っているように、自分が直接体験したことについて語っているところ以外は、信頼性が高いとはいえないように思います。更に、「東遊記」「泉達録」「古実記」「甲子夜話」などは、江戸時代も半ば以降に成立したもので、それまでの史書類(特に甫庵太閤記)を下敷きに、伝聞・採録によって成り立っているものであり、伝承記録集・史話集という性格の強いものといえます。一般に伝承というものは、時代が下るにつれてA→A'→A''というように異説を生じ、詳細になっていく傾向を持ちます。それは伝承を伝えていく人々の想像力が働いているからです。ですから、それらに記されているということだけで事実であると断言するわけにはいきませんし、むしろ想像の産物と考えたほうがよいこともたくさんあります。ただしそれは、成政のザラ・針ノ木越え伝説が、どういう人々によってどのように伝承されていったかということをたどる時には、きわめて重要な役割を果たすことになるといえます。

二 甫庵太閤記には

どんなことが書かれているか

そこで、最初に成政のザラ越えを記した甫庵太閤記についてまず見てみましょう。原本

表1 佐々成政ザラ峠越えに関する主な史料

史料名	成立年代	西 暦	編著者(身分役職等)	成立の背景等
家 忠 日 記	天正5年～ 文禄3年	1577年～ 1594年	松平家忠 徳川家康の家臣、忍城主。普請巧者。伏見築城等に関する。関ヶ原の前哨戦で自刃	家康の側近として知り得た情報や自らの行動、日常生活の様子を簡潔に記したもので史料としての価値は高い
甫 庵 太 閤 記	寛永2年	1625年	小瀬甫庵 尾張出身の医師・儒者。池田恒興、豊臣秀次に仕え、晩年は加賀藩お抱えとなる	秀吉の祐筆大村由己の「天正記」や太田牛一「たいこうさまぐんきのうち」等を資料に加賀藩家老横山長知の話を聞いて著す
末 森 記	元和元年	1615年	岡本慶雲 初め佐々成政の馬廻り役を勤め、末森の戦いの後、前田利家の馬廻りとなる	成政、利家に馬廻りとして仕え、末森城の攻防前後の様子を日記に書きつけてあったので、それを取り集めてまとめたもの
当 代 記	寛永年間 (推定)	1625年頃	不明	幕府当局者から情報入手できる立場にあった者が手もとの史料や手控えを整理して後年執筆したものとは推量される
武 功 夜 話	原本は寛永年間、茂平治(改)版は享保年間	1639年頃 1720年頃	原本は吉田雄かね(織田信雄の傳役前野(小坂)孫九郎雄吉の嫡孫)。茂平治は雄かねの子孫で「早引大節集」編者	前野家三兄弟(孫九郎雄吉・将右衛門長康・小兵衛勝長)の書留等を整理し、前野氏遺臣から聞き糺して編纂したもの。茂平治は更にそれを改書・再写した
東 遊 記	寛政7年	1795年	橋南谿	南谿は天明2年から6年にかけて各地を旅行、見聞した各地の奇談・奇事を記述した
肯 構 泉 達 録	文化12年	1815年	野崎雅明 富山藩士(詳細不明)	肯構は書経から来ているものと推定され、親の業を子が受け継ぎ為すの意
越 中 古 実 記	文政9年	1826年	編著者不明	
甲 子 夜 話	文政年間	1820年以降	松浦静山	博覧強記ぶりは各時代各地多岐にわたって興味深い、安芸の狸が人と話したという様な話の真しやか記されている

現代訳版(教育社)からその太閤記の要点を書き抜くと次の様になります。

▼天正十二年十一月下旬、成政は深い雪を冒しさらさら越えという極めて険しい山中を越えた。

▼従う家来達がどこへ行くかと尋ねると、遠州へ行つて家康公に会うつもりだと答えた。前田に情報が漏れない様に極秘に立したのので明かすこともできなかった。身辺の家来や小姓には起請文を書かせ、毎日食事を

出す等常日頃と同様にふるまう様にさせてある、と答えた。

▼雪には不慣れた若者達百人程を引き連れ、高い山の峰へよじ登り、南を見ると人里があるらしく烟が見えた。かんじきを履いて降りて行くと思外にたやすく麓の村に着いた。

▼富山城を十一月二十三日に出発し十二月一日、上諏訪に着いた。そこから家康に連絡を取ると乗馬五十頭、伝馬百頭を迎えとして送つてよこした。

▼十二月四日、浜松に着いて家康に面し秀吉攻略の打ち合わせをした。翌朝発つて清洲に行き信雄に会って評議を行った上、再び深い雪を分けて越中に帰った。

▼その後、信雄は秀吉と和解してしまったので成政が儀を尽くした甲斐もなかった。

甫庵はこの成政のザラ峠越えをどのようなにして知ったのでしょうか。彼は太閤記を書くのに「天正記」(大村由己)や「たいこうさまぐんきのうち」(太田牛一)をよりどころにしたと言われています。ところがこれらの中にはザラ峠のことは触れられておりません。天正十三年の八月に秀吉が成政の富山城を包囲した時、ザラ峠への起点となる芦崎寺を襲っていることから、当時既に成政がザラ峠を越えて家康と連絡を取り合っていたということは情報通の知るところとなっていたものと考えられます。戦国大名が絶えず間者(忍び)を放つて情報を収集したり、偽の情報を流して敵の後方を攪乱したりしたことは、様々な史料にも登場し、よく知られていることです。成政の極秘の行動も時間が経過して、問者らの知るところとなったものともいえませんが、後で触れるように、私は少し別に考えています。

ろにしたと言われています。ところがこれらの中にはザラ峠のことは触れられておりません。天正十三年の八月に秀吉が成政の富山城を包囲した時、ザラ峠への起点となる芦崎寺を襲っていることから、当時既に成政がザラ峠を越えて家康と連絡を取り合っていたということは情報通の知るところとなっていたものと考えられます。戦国大名が絶えず間者(忍び)を放つて情報を収集したり、偽の情報を流して敵の後方を攪乱したりしたことは、様々な史料にも登場し、よく知られていることです。成政の極秘の行動も時間が経過して、問者らの知るところとなったものともいえませんが、後で触れるように、私は少し別に考えています。

結論から言えば、決定的な二つの点で甫庵の説には誤りがあります。

その一つは日付です。先に見たように成政一行が浜松に着いたのは(天正十二年)十二月二十五日のことでした。家忠日記に記されたこの日付は、まず動くことにはないでしょう。二つ目は成政が家康と会見したのを信雄と秀吉の和議成立の前のこととして記している点です。和議は既に十一月に成立しており、家康はその月の十六日には軍を撤退させました。成政は和議の成立と家康の撤退を知って富山を出立したのです。この重要な二つの点に誤りがあることは、小瀬甫庵が、成政のザラ峠越えの話題性には興味を持っていなかったように思えます。別な言い方をすれば、当時そういう話題は、情報通の間でよく知ら

表2 ザラ・針ノ木峠越え関係年表

年	記 事	備 考
天正12年(1584)	3月13日、家康、清洲城に入って信雄と会談。17日、森、長可軍を撃破し、小牧山に築壘。21日、秀吉、大阪発、27日、犬山入城。 3月末、前野小兵衛・佐々平左衛門ら5名「山中越中より罷り越し難儀の様体」にて前野村へ来る。 4月6日、池田・森・堀・三好軍潜行して岡崎へ進撃。家康、気づき本隊にて追撃、これを殲滅。7日、伊勢の信雄方松ヶ島城陥落。両軍再び桑田・小牧に対陣し戦線膠着。北伊勢は秀吉軍優勢に展開。 11月、秀吉、桑部、柿多を奪う。12日、信雄、秀吉と単独講和。16日、家康、清洲より撤兵。 11月下旬(23日)、成政、富山城を出発。 12月1日、上諏訪着。4日、浜松着、家康と対面。 10日、家忠、岡崎へ来る。岡崎にて孫九郎勇吉(信雄側近)と密談。佐々蔵助家康拜謁を伝える。家忠、深溝へ帰る。 12日、御義丸(結城秀康)、秀吉養子として浜松立出。 14日、信雄、浜松着、家康と懇談。 25日、越中佐々蔵助、浜松来訪。吉良信雄鷹野御礼申候。 晦日辰の五ツ時(午前9時)頃、前野小兵衛ら8名、前野村を訪なう。成政、生駒八右衛門(信雄伯父)を案内に信雄に会い懇談。 天正13年(1585) 3日酉の四ツ(午後10時)頃、前野村を出立。	武功夜話拾遺巻6 甫庵太閤記 甫庵太閤記 家忠日記・武功夜話 家忠日記 家忠日記 武功夜話 武功夜話

れていたと考えてもよさそうです。ここで、太閤記が成政のザラ越えを和議成立の前、それも戦いの始まる前の事として記していることは、実は注目に値する重要な意味を持っているかと思えます。この点については後でまたふれることにしましょう。

このように太閤記には大事な二つの誤りがあります。『ザラ越え』の内容も、事実の記録というより想像に基づく記述といった方がよいことに気付かれます。「乗馬五十頭、伝馬百頭」などというのがまずそれです。語呂が良すぎてもいかにもお話しめですが、それはさておくとしても、伝馬百頭というのは大変な大部隊で隠密の行動には全く似つかわしくありません。だいたい何のために家康は伝馬百頭を迎えにこしたのでしょうか。成政がそれほどの荷物を持参したはずは勿論ありませんし、もし家康が成政のために何か荷物を準備したとするなら、それほど大量の荷物を、どこで何に使う必要があったのでしょうか。冷静に考えればおかしいことで、これは、「それほど」の期待を家康はした」ということを印象付けるための物語の「修辭」に過ぎないでしょう。この時期、家康は次男の於義伊丸を養子として秀吉にくれる約束をしており、たとえ成政の来訪を喜んだとしても、わざわざ賑々しい行列を組んで秀吉方を刺激するような愚かなことは、まずしなかったものと思われれます。ただ、甫庵が「太閤記」を記した当時、既にそういう伝承に近い風聞が巷にあったとすれば、これは別の意味を持つてくること

になります。これについてはまた後で考えることにします。

身辺の武士や小姓に起請文を書かせ、いつもの様にふるまわせたというのを読み手を意識した作者としてのサービスというべきでしょう。起請文を書かせようと書かせまいと、百人ほどの家来が一時に城中・城下からいなくなつて、それが長い間誰にも知られないなどということは、あり得ることはありません。

山越えの様子も具体性を欠くものです。「高い山の峰へよじ登り、南を見ると人家の煙が見えた」とありますが、立山や後立山などの山岳に登った経験のある者ならもう少し具体的な表現をしたでしょう。実際に現地を踏破した者ならば、いつそのことです。時は厳冬の厳しい気象条件の中を、長い谷筋を雪崩の恐怖と厳寒に耐えながら遡上し、二つの峠を越え激流を渡ったのですから、誰かがそれを語つたとすれば、その具体的な様子がどこかに現れていてもよさそうです。ですから、甫庵の記したことは、「成政は『ザラ峠』という極めて厳しい難所を越えて家康の許へ至つた」というだけの伝聞に基づいて作成された「お話」であると考えた方がよさそうです。

それでは、太閤記以外の他の史書はどうでしょう。

たとえば「肯構泉達録」を取り上げてみましょう。これは江戸時代文化年間、富山藩士であった野崎雅明という人物によって記されたものといわれています。泉達録は、「成政、遠州浜松に到る事」として四千字ほどに互つて経過を記しています。成政が浜松に向かったのは「和議」のあとのこととしており、また浜松についた日時も十二月の十四日とし

ています。そういう違いはあるものの、その骨子は甫庵の太閤記を出るものではありません。それどころか、「一書に」という表現で、成政主従が立山山中で凍えて難儀をしている時、「いぶせき柴の庵」に二人の翁がおり、立ち寄つて話を聞いてみるとそれは悪七兵衛景清(鎌倉時代の人物)であつたといふなどというところが真面目に記されています。このことをとつてみても、「泉達録」は基本的に物語の世界にあるものと言つてよいでしょう。

後の時代に編纂された史録類は、どれもこの「泉達録」のような性格を共通に持っています。富田景周(越後加三州史の著者)は、ザラ峠越えの誤りは「太閤記から出て諸書に及んだ」と述べていますが、景周の言うように、これらの史録類は、いずれも太閤記を一つの拠り所として成り立っているようです。そしてその後の様々な推察や伝聞等を加え、ザラ峠越えの様子を、それぞれ太閤記よりは詳しく語っています。時代が下がるほどそれが詳しく多岐なことが、かえって架空の想像であること、伝承にすぎないことを物語っているとさえいえます。中には「奥」で越えたなどということまでまことしやかに伝えているものもありますが、絶対する以外ありません。

(信濃史学会会員)

(つづく)

山と博物館 第52巻 第3号

発行 千 長野県大町市大町八〇五六一
市立大町山岳博物館

TEL 〇二六 一三二〇二
FAX 〇二六 一三二〇二

E-mail: sanpaku@city.oma-nagano.jp
URL: http://www.city.oma-nagano.jp/sanpaku/

印刷 奥村印刷
定価 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇五四 〇七一 三三九三